ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子図書館　編集：松居友
５８号・２０１７年２月

ミンダナオの貧困地域
低地から山に追われた先住民
戦闘地域のイスラム教徒
都市で家を持てず、
海にはりだした小屋にすむクリスチャン。
学校にも行けず、
病気になっても薬も買えずに、死んでいく
一日に三度の食事もままならない。
山では、米も塩も買えず
カサバイモや自生しているバナナをとって
子どもたちは、川でカエルやカニを捕り生活
ミンダナオ子ども図書館の奨学生が言った
何日もご飯が食べられなくって
お腹がすいてくるとねえ
お腹がいたーーーく、なってくるんだよ。
そういう地域の子どもたちを
見るに見かねて始めたミンダナオ子ども図書館
読み語り以外にも、奨学制度、医療、
そして農業・文化支援活動も行っている。
最初は、上からの「可愛そう目線」にとらわれて、
子どもたちを見ていたけれど
だんだんわかってきたのは、
貧しくても、友情と愛の力で生きぬいていく
彼らの生きる力の豊かさだった。
戦争や病気や家庭崩壊で、親がいなくなっても、
たとえ、路上をさまよっても
彼らは、引きこもらないし、自殺もしない。
「だって、友だちがいるもん！」
「だれかが、助けてくれるもん！」
世界のすべての人々が、
そんな子どもたちを見習って
国境を越えた友情と愛を心に、助け合えれば、
世界から貧富の格差は、消えていく？

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

生きるということ

宮木　梓

ねえ、動物を食べるために殺すところを、見たことがある？

怖くなかった？

泣かなかった？

目の前で、豚がゆっくりと死んでいく。空気を引き裂くような悲鳴がだんだんと弱くなり、泣き声に変わり、それが次第に途絶えていく。生きていた身体が、肉になっていく。

年が明けた1月4日。

「SUKSUK TO KOLLOU（ソクソク　ト　コッロウ：マノボ族の、焼き畑を始める前に、ナタ、砥石を清め、祈る儀礼）」を見学するため、アラカンの山あいにある小さな村、キアタオにいる。

朝食後、のんびりしていると、豚の悲痛な鳴き声が響く。

ダト（集落のリーダー）の家の庭で、「SUK SUK」のおかずにする豚の屠殺が始まる。男性3人がかりで豚を押さえ、首にナイフを刺して血を抜く。血も料理に使うので、ビスケットの入っていたプラスティックの箱に、こぼれないように大事に受ける。

屠殺している傍ではお湯が沸き、豚の毛を削ぐ準備ができている。

家の中の台所では、薪で大鍋にご飯を炊いている。その間にも、近所からダトたちが続々と集まって来て、あいさつをしたり、ネイティブコーヒーを飲みながらおしゃべりしている。

お昼近くにご飯が炊け、豚のおかずも出来上がったが、まだ儀式は始まらない。バナナの葉を取って来て、一人分ずつご飯とおかずを包み、お弁当を作っている。後で集まった人たちに配る分らしい。

午後2時近く。部屋の真ん中にゴザを敷き、その上にバナナの葉を何枚も重ねる。そして、葉の上に白いご飯が盛られ、ご飯の上に先ほどの豚で作ったおかずが載せられる。

ダトたちは、自分たちが焼き畑で使うナタや砥石を持って来ていた。ナタはそれぞれの家できれいに研がれている。キアタオのダトが、ナタを一本ずつ、もう一度ふきんでぬぐい、ご飯にさしていく。集まった全てのナタをご飯にさし終わり、砥石にもご飯を載せたら、神様に、豊作と、農繁期の間の家族の健康と安全を祈る。

お祈りが終わり、それぞれのダトたちが儀礼の意義を若者たちに話してから、ご飯と豚を食べる。この時、自分のナタに載ったご飯を自分のお皿に取る。ナタにご飯がたくさんついていると、畑が豊作になるらしい。

集まった人たちにも、バナナの葉で包まれたお弁当が配られる。お年寄りも、お父さんもお母さんも、お兄さん、お姉さん、小さな子どもたちも、みんながバナナの葉の上のご飯の山から取り分けた、ご飯と豚をほうばる。

余ったご飯は、家じゅうの容器に入れてお客さんが持って帰り、家族へのお土産になる。容器は後で返しに来るのだろう。食事の後、ダトたちはゆっくりとコーヒーを飲んでいる。

これで、この日の「SUKSUK TO KOLLOU」は終わった。

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
講演や家庭集会の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。
メールや電話でもお申し込みください。メール：mcltomo@yahoo.co.jp
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

私にとって最も印象的だったのは、儀礼そのものではなく、豚の屠殺だった。

豚は、庭に連れていかれるとき、自分が殺されることを知っている。

足を縛られ、首を洗われる間、力の限り抵抗し、ずっと泣いている。首にナイフを刺されても、即死できるわけではない。1分ほど豚は泣き続け、泣き声が次第に弱くなり、身体がぐったりと動かなくなる。

私のすぐ近くで、この家の8つくらいの女の子も、じっとそれを見つめている。後ろで、キアタオに同行した焼き畑研究をしている71歳の男性が、「日本の若い人は、豚の屠殺を見ると泣くんだ」と、現地の通訳の女性に話す声が聞こえる。

まあ、なんということ！

私にとって、豚の悲鳴はお祭りの始まりであり、ご馳走の予感だ。

けれど、私も、日本で鶏の屠殺体験に参加したとき、大学生が何人も泣いているのを見たことがある。今まで平気で鶏肉を食べていたのに、自分で殺すと泣いてしまうなんて、不思議だ。

「SUKSUK」が済んだ次の日、私たちはキアタオを離れ、MCLに戻った。MCLに住むマノボの奨学生たちにも、「SUKSUK TO KOLLU」のことを聴いてみたくて、キアタオで撮った写真を見せる。

ビサヤやムスリムの子たちは、この儀礼を知らないようで、マノボの子たちが説明しているのが聴こえる。

写真を「見せて、見せて！」と集まって来た男の子たちに、聞いてみる。

「動物を屠殺するのを見るときに泣く？日本では、豚や鶏を屠殺するとき泣く人がいるんだよ」

「泣かないよ！」

「でも、それを見て涙を流している人は可哀想だなって思うよ。だって、泣いているんだもん」

「アズサも泣くの？」

「私は泣かないよ」

「どうして？」

「だって、食べるもん」

「アハハハ！」

「僕はムスリムだから豚の屠殺は見ないけど、ヤギを殺すとき、その前でうれしくて踊っちゃう！結婚式とか、お祭りのときの特別だから！」

次は、9歳や11歳のマノボの女の子たちに聞いてみる。

「豚の屠殺を見たことがある？」

「もちろん、あるよ」

「殺すところを見るの、怖くない？泣かない？」

彼女たちは、「どういう意味？」と、きょとんとした顔をする。

「あのね、日本では、豚や鶏を殺すところを見ると、泣いちゃう子がいるんだって」

彼女たちは、目を輝かせた笑顔で答える。

「私は、お父さんやお兄さんが豚を殺すとき、とってもうれしいよ！豚って、おいしいよねぇ」

「私も！」

「私はね、牛も、水牛も、豚も、鳥も、ヘビもカエルも犬もネコも食べるよ！」

「私のところは、ネコは7つの命があるからって、食べないんだ。でも、馬は食べたことある。おいしいよ！」

キアタオ出身の15歳の女の子は、「私は泣きそうになっちゃう。豚が殺されるとき、すごく大きな声で泣くじゃない。可哀想だなって思うの」

「その後、その豚を食べる？」

彼女は、はにかんだ笑顔で、私の目をそぉっと覗いて答える。

「…食べるよ。だって、おいしいもん…」

私は、村の人と一緒に「SUKSUK」のご馳走を食べながら、殺されて食べられた豚の魂は、自分の肉を私たちに捧げることを受け入れて死んでいったのだろうか、と神妙に考えていた。

自分が多くの命に生かされているのだという、分かっているつもりになっていることを、もう一度見つめていた。

キアタオからMCLに戻った週の土曜日には結婚式があって、披露宴のあったホテルでは、子豚の丸焼きが振る舞われた。モノトーンの制服をスマ

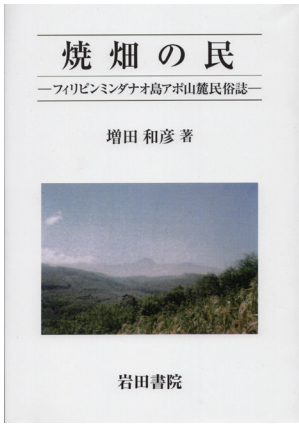
奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

ートに着こなしたウエイターが、丸焼きを切り分けて配膳してくれる。

骨付き肉を齧りながら、この豚が、どこのどの豚だか知らないけれど、今朝、この子も悲鳴を上げて死んでいったに違いない。なのに、私はこの豚が死ぬところを見ていないから、ただ、淡々と肉を齧って飲み込んでいる、と思う。きっと、キアタオで屠殺を見たばかりから、こんな風に感じたのだ。

MCLで、子どもたちと「お腹が空いたねぇ」とお茶椀3杯分くらいのご飯を食べながら、毎食毎食、「このお魚はどこの海から…」と考えることはない。けれど、私たちは、たくさんの穀物や野菜、動物や、それを育む大地や水や風、太陽に抱かれているのだと、知っているのだと思う。

参考文献：増田和彦『焼畑の民―フィリピンミンダナオ島アポ山麓民俗誌』岩田書院　2016年



わたしの少女時代の思い出から（5）

松居　エープリルリン

とつぜん、学校の鐘が鳴る音が聞こえた。

わたしは、びっくりして子どものころの想い出から、目を覚ました。

学校にいそがなくっちゃ、国旗掲揚にまにあわなくっちゃ！もう少しで遅刻しそう！

どきどきしながら、幸せな子ども時代の想いでから飛びだすと、国旗掲揚式の列に飛びこんだ。

クラスメートの友だちは、わたしの顔を見るといぶかしげに言った。

「どうして、そんなに悲しそうな顔をしているの？」

「何かあったの？」

けれども、何も答えられず、ただ首を横にふるだけだった。しかし、友だちは心配して、なっとくしなかった。

「何かあったんでしょ。言ったら良いのに。」

わたしは、自分のほおに涙が伝わって流れているのに気づかなかった。そこで、友だちたちは、わたしを抱きしめると、慰めてくれた。

わたしたち生徒は、イスにこしかけて、先生の話に耳をかたむけた。

先生は、試験の日が近づいているから、ちゃんと準備をはじめるように、と話し始めた。けれど、教室はうるさくて、外からも話し声が聞こえてくるので、クラスの子どもたちに向かって、静かにするように言った。

わたしは、すわったまま、ぼんやりと生徒たちを見ていた。

静かにするように、といわれても、どうしたらいいのか、何を言ったらいいかがわからなかった。

自分の意識は、どこかはるか遠くにいったままだった。

わたしは、一方向に顔を向けたまま、ぼおっと思いに沈みこみ、ただぼんやると遠くを見つめていた。

外は明るくてさわやかだった。

太陽の光が、窓のひさしをとおして流れこみ、緑の花のもようがプリントされたカーテンと、カーテンの両端にぬいこまれたレースを、明るく照らし出していた。しかし、レースのいくつかは古かったので、破れてあながあいていた。クラスにしつらえられたイスは、６０個のひじ掛けイスで、６０人の生徒がいた。

先生のためには、机といすが一つあり、文字をかくための黒板がさがっていた。教室は、雑然としてよごれていた。なぜなら、クラスメートの子どもたちは、ゴミを自分のイスの下に投げ捨てていたし、ときどき紙くずを投げあったりしていたから。

紙くずのなげあいっこは、後ろの席から始まって、クラス全体に広がっていった。

集まっていた男の子の一人が、彼の前の席の女の子に、紙くずをなげた。その子は、彼のお気に入りの少女だった。

少女は、あたりを見回すと、頭をふってふりむいた。

「だれよ？紙くずを投げたのは！」

少女は、さけんで、怒りをこめたまなざしで後ろを見た。

「ぼくじゃないよ！」少年の一人が答えた。

「ぼくでもないよ！」別の子が答えた。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。
貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。
保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている
２００名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。

「たぶん、やつらだよ！」
もう一人の子が、ドアの近くに座っている男の子たちを指して言った。
それと同時に、少年たちは、笑い転げた。
しかし、私たちの幾人かが笑わず、怒っているのをみて少年たちもだまった。
少女の名は、クリスティーナ。
彼女は、いすに座ったままぶつぶつぶつぶやきながら、親友のジェイデュにたずねた。
「紙くずを投げたのは誰か知っている？」
しかし、彼女も誰が投げたか知らなかった。
クリスティーナは、それでもときどき後ろを振り向いた。
「エープリルリン！エープリルリン！エープリルリン！」
先生が三度わたしを呼んだ。でも、わたしには聞こえなかった。先生は、欠席や退席がいないか、確認していたのだ。
とつぜん、わたしの方に、誰かが触れたのをわたしは感じた。そのとき、わたしは、不思議な幻想からめざめた。
「フーーッ！」驚きのため息が口からこぼれた。
「先生が、三度も名前を呼んだんだよ！」
隣の席に座っている、オマールがいった。
「エッ！ほんとう！」
クラス中の子どもたちが、まゆげをあげて目をまん丸にして馬鹿にしたように笑った。
「あなたの心は、寒風に吹き飛ばされて、どこかかなたの人がいない場所をさまよっていたのね、エープリルリン！」
クラスの子どもたちは、大笑いをした。教室がどよめいた。お腹を抱えて笑う子もいた。
「いったい、どうしたというの！なぜそんなに一人で寂しそうな顔をしているの？」先生はいった。
なんと答えたら良いのかわからなかった。
わたしはうつむいて、床をみつめた。
長い髪が、肩からたれた。
わたしは沈み込んで、どうやって今の気持ちを伝えたら良いか、と考えた。
しかし、どこから説明して良いかわからなかった。
どう話したら良いの？どうやって説明したら良いの？
困惑したし、話すことに躊躇もあった。
「どちらにしても、いいわ、エープリルリン！今、話さなくってもだいじょうぶ。」
先生は、そう話した。
わたしは先生の顔をみつめた。
そして、わたしの気持ちをわかってくれてありがとう、という様子を見せて微笑んだ。
「よろしい、生徒たち、自分の席にもどりなさい。今日の学習をはじめます」先生はいった。
「はい、先生」子どもたちは、声をそろえていった。
リン！リン！リン！
ベルが三度鳴った。
15分間の休憩！
それは、みんなにとって、一番楽しい時間。おやつを食べても良いお休み時間だ。

本を買って下さるのも、寄付支援の一つになりますよ！

「サンパギータのくびかざり」
今人舎　定価 1600 円

「手をつなごうよ」
彩流社　定価 1800 円

「わたしの絵本体験」

「昔話とこころの自立」
教文館　定価 1400 円

「昔話の死と誕生」

これらに関わらず、松居友の著作の著者印税は、全額をミンダナオ子ども図書館に寄付しています。
寄付と言うよりも、ＭＣＬの子どもたちと私たちは、皆で一つの家族だから！

支援者の皆さんも家族です。セカンドハウスのつもりで、いつでも訪ねていらしてくださいね。
ダバオ国際空港に着く時間を、メールで宮木梓さんに教えていただければ、お迎えにあがります。
特別な接待はしませんが、宿泊料もとりません。食事も子どもたちと一緒。
なぜなら理由は、子どもたちといっしょに、家族として皆さんを、友情と愛で迎えたいから！！！

この子たちの支援者になっていただけませんか！

Analiza E. Sumandang（リサ） 15歳 マノボ族 マノンゴル高校2年生
Analie E. Sumandang（モナ） 15歳 マノボ族 マノンゴル高校2年生

日本の皆さん、こんにちは。
私たちは双子の姉妹で、2012年からMCLの奨学生になりました。
家族や友達から、アナリーは「モナ」、アナリサは「リサ」と呼ばれています。
ときどき、二人合わせて「モナリサ」と呼ばれることもあります。
私たちは、プレジデント・ロハス地区グリーンヒルズ村のブロック・オッチョという集落の出身です。
マノボ族で、キリスト教（プロテスタント）を信仰しています。
私たちは、みんなで7人兄弟です。
姉が一人いて、彼女もMCLの奨学生でしたが高校3年生で学校を止めて、ダバオで家政婦をしています。どうして学校を止めたのかは話してくれませんでした。きっと、学校が遠くて、家にご飯もなくて、通うのに疲れたんだと思います。

リサ マノボ族 15歳

私たちは両親がいますが、とても貧しいです。父は、よその人の田んぼで除草の仕事をしていますが、仕事は週に2日しかありません。
田んぼの仕事は、日給だいたい100ペソ（200円弱）。仕事がない時は、小さな土地でバナナを育てています。
バナナは、1キロ50ペソで売ります。
母の仕事は、精米所でのお米のもみ殻飛ばし。母は週に3日働いて日給は150ペソ。
母の方が収入が多いです。
お米は1キロ約45ペソで買います。でも、兄弟も多いから、お米を食べられるのは週に2日くらい。
お米を買えないときは、3食バナナか、サツマイモを食べています。
サツマイモは叔母さんにもらいに行きます。
バナナは、「カルナバ」という種類の大きくて少し甘いバナナで、ゆでてお塩をつけて食べます。
朝ご飯は、甘いネイティブ・コーヒーとバナナ、お昼と夜のおかずは塩やブラッド」と呼ばれる小さい干物のお魚。
ブラッドは1/4キロが30ペソくらいで、いつもは食べられません。
お金がないときは、近くで里芋の葉っぱを探してきて、ゆでておかずにします。

私たちは、2016年の9月から、MCLに住んで高校に通うことになりました。
学校が遠くて歩いていくのが大変だし、食べ物が無かったりお弁当を用意できなくて、学校を休むことが多かったからです。
私たちも、高校を卒業したいし、両親もそれを願っているから、
私たちが家を出ると寂しくなるけど応援してくれました。
それに、長女がダバオに出稼ぎに出てしまって、私たちが次女だから、
私たちがいないとお母さんは子守りや掃除、水汲み、
料理などでとても忙しいんです。
この前の休暇に帰った時は、洗濯物がたらい2杯分もたまっていて、
私たちで洗濯をしました。
家が本当に恋しいけど…、
でも、私たちが家にいるとたくさん食べるでしょう？
私たち2人が家から出ると、その分弟、妹がたくさん食べられるから…。
ごめんなさい、涙が出てしまいます…。
高校を卒業して、できれば大学も出て、
いい仕事を見つけて家族を助けたいです。

モナ マノボ族 15歳

モナは、学校ではフィリピノ語が得意で、数学が苦手です。
もし大学に行けるとしたら、教育学部に行って小学校の先生になりたいです。
そして、グリーンヒルズに戻って教えたいな。
弟たちみたいな小さい子と遊ぶのが大好きなんです。
でも、先生になるのは難しいから、無理だったらマニラに出稼ぎに行きたい。
村も家族も大好きだけど、家族を助けるためなら離れ離れになっても頑張ります。
歌うのが好きで、踊るのは苦手。
でも、リサは踊るのが得意で、歌は音痴なの。
リサもフィリピノ語が得意で、英語と数学は苦手。
リサも大学に行きたいけど、もし無理だったら食堂のウエイトレスになって、家族にお金を送ってあげたいです。
私たちは、二人でいつも一緒にいました。双子で良かったなって、幸せに思います。
これからも励まし合って、学校を卒業できるよう頑張りたいと思います。

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
講演や家庭集会の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。
メールや電話でもお申し込みください。メール：mcltomo@yahoo.co.jp
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

Jamaica M. Sakib　14歳　マギンダナオ族　マノンゴル高校２年生

ジャマイカ　イスラム　１４歳

私の名前はジャマイカ。
出身はピキットのブロッド村で、イスラム教を信仰しています。
小学校を卒業して高校生になるときに、MCL から高校に通うことにしました。
実家からだと高校が遠くて、通うのが大変だからです。
MCL の奨学生になったのは、小学３年生の時です。
お母さんが死んでしまって生活が苦しかったけど、勉強を続けたかったんです。
お母さんは、私がまだ幼稚園に上がる前にシリアに出稼ぎに出て、2013 年の戦争に巻き込まれて亡くなりました。もう、お母さんの顔も覚えていません。
でも、2015 年にお父さんが再婚して新しいお母さんができたから、あまり寂しくありません。私は、新しいお母さんが大好きです。
私の、両親が同じ兄弟は４人、お母さんの連れ子が３人、お父さんと新しいお母さんの赤ちゃんが一昨年の 12 月に生まれたから、みんなで８人兄弟になって、とっても賑やかです。
お父さんは、自給用にお米を育てていて、お母さんはピキットで服を売っています。
お父さんが再婚する前はご飯が食べられない日もあったけど、今は１日３食お米を食べられます。おかずは野菜や、タンバンという名前のお魚。
私も、おばあちゃんに教えてもらって料理をします。
私は兄が一人いるけど長女なので、新しいお母さんが来る前は料理や洗濯、弟や妹の世話で忙しかったです。
家族と離れて MCL で暮らしていて、寂しくなることもあるけど、マノボやビサヤの子とも仲良くなって楽しいです。
できれば大学を卒業して、いい仕事を見つけて家族を助けたいです。
好きな科目は地理と歴史と数学、苦手なのは科学です。
高１の中間テストの平均点は、80.35%でした。
絵を描いたり、ポスターを作るのも好きで、ピンクと青色が好きです。
私の人生で大切なものは、家族と勉強、信仰です。そして、世界から戦争がなくなってほしいです。
日本の皆さん、私たちの奨学金を支援して下さって、どうもありがとうございます。
愛する家族と幸せに暮らしておられることを祈っております。

Francis Yaniel D. Longyapon　６歳　マンダヤ族 / ビサヤ族
セントメリー小学校１年生

ヤニエル　ビサヤ族　６歳

僕のニックネームはヤンヤン！
誕生日は６月２日で６歳、小学１年生だよ。
僕の生まれたところは、ママ・エイプリルの故郷に近いマティという、海のあるところ。MCL のあるキダパワンからは、車で６時間くらいかかる。
僕のお父さんはマンダヤ族で、お母さんはビサヤ族。
家族はカトリックを信仰しています。僕は、５人兄弟の末っ子。
僕が小さい時に、お父さんとお母さんは離婚してしまいました。
お母さんは、違う男の人と再婚して、そちらに子どもが３人います。
僕は、一番上のお姉ちゃんと一緒に、キダパワンにいる叔母さんに引き取られました。お姉ちゃんは、今高校１年生。
お姉ちゃんのことは大好きだけど、よくけんかする。
だって、すぐ怒るんだもん。
お母さんのことが恋しいけど、一緒に暮らしている叔母ちゃんたちや、いとこのお兄ちゃん、お姉ちゃんも、飼ってる犬も大好き。
勉強も好きだよ。得意なのは、算数とフィリピノ語で、理科は苦手。
大学を卒業して、小学校の先生になりたいな。小学校の先生になったら、家族を助けられるよね。
好きな色は赤で、踊るのが大好き。好きな食べ物は子豚の丸焼き！結婚式とか、特別な誕生日しか食べられないけど、おいしいんだよ。
僕の人生で大切なものは、「Happy･Love･Family」なんだ。寂しくしているのは、好きじゃない。いつも楽しく、笑ってなくちゃね！
僕の叔母さんの家は、MCL の敷地内にあるから、毎日 MCL の子たちと遊ぶのがとても楽しいです。
みんなで頑張って、学校を卒業して、夢を叶えたいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

小学生（里子）：年間４万円、高校生：６万円、大学生：７万円です。
極貧のなかでも、孤児や崩壊家庭の子で、イスラム、クリスチャン、先住民を均等に採用しています。
支援者の方が、訪問された場合、奨学生に会いに家までお連れします。
ほとんどの子たちが大喜びで、時には抱きついて泣き出します。
MCL に滞在してください。家族ですので、空港までお迎えに上がり、宿泊費はとりません。

上の子たち以外にも、いまだに140名ほどの子たちに、支援者が居ません。
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」から「まだ支援者のいない子たちへ」をクリック
パスワード：mindnao で、紹介されています。ご覧ください。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

卒業生たちの過去の想い出と今（2）

ミンダナオ子ども図書館（MCL）のスッタフになった、イスラム教徒のイズラハイダさん

わたしの名は、イズラハイダで、２７歳です。
５人兄弟の２人目ですが、右の眼が白く盲目で生まれました。
でも、もう片方の目で美しい世界を見ることができて感謝です。
片眼が盲目で、貧しい一家でしたが、愛に満ちた家族のなかに生まれたことを幸せに思います。
６歳になって、学校に通い始めました。
でも、学校友だちやクラスの子たちを前にすると、盲目であることが恥ずかしかったので、いつもサングラスをかけていました。
盲目であることが知られたら、いじめられるんじゃないかと怖かったから。
そんなわけで、大きくなるまでずっとサングラスをかけ続けていました。
家は、経済的に豊ではなかったけれど、盲目であることは、学業を終了したいという思いの妨げにはなりませんでした。
それどころか、卒業したいという思いは強くなっていったのです。

学校は遠くて、通うのが大変でした。
小さな舟で川を渡り、川岸沿いに歩きます。
授業のある日は、父さんが毎日、舟で送ってくれました。
雨の日などは、洪水になって大変でした。
おぼれそうになって、救ってもらった記憶もあります。
ありがとうアッラー神様！
片眼が見えなかったけど、出来ればいつか、お医者様に診てもらいたいという夢は持っていました。

２００４年のある日、友さんと奥さんが、わたしの叔母の家にやってきました。
そのときわたしも偶然いたのですが、彼らはわたしを見て哀れに思ってたずねました。
「目は、どうしたの？病院にいって診察してもうかい？」
「義眼を入れることもできるかもしれない。」
それを聞いて、嬉しい気持ちとちょっと怖い気持ちが起こりました。
「ゆっくり、考えたら良いよ。」
その後すぐに、わたしは、後悔しないためにも、思い切って目を診てもらうことに決めたのです。
そして、手術の結果、わたしの病気の目をとって義眼をいれたのです。
手術は、大成功でした。
手術のあと、わたしは、MCL と出会って、MCL が自分の人生を変えてくれたと感じました。

そして、高校の卒業式の日、MCL のスタッフの女性が、わたしをたずねて写真をとって、わたしを奨学生にしてくれたのです。
「ビックリ仰天！」
彼女はいいました。
「あなたは、今 MCL の奨学生になったのよ。これで、大学に行けるのよ！」
その時の気持ちは、言葉でいいあらわせません。
それを聞いたとたん、うれしすぎて、うれしすぎて。
「わーーぃ！本当にわたしの夢がかなったわ！！！」
我が家には、娘を大学にいかせるほどの経済的な余裕など無かったからです。
アッラー神様！わたしは、学業を続けられる！
わたしは、南ミンダナオ州立大学の商科に入りました。
MCL の友さん、エープリルリンさん、スタッフのみなさん。
そして、とりわけ支援者の方のおかげで２０１０年に卒業できたのです！
卒業式は、わたしの人生でも、一番嬉しいときでした。
MCL がなかったら、大学までは行けなかったからです。
感謝という言葉を超えて、どう表現したら良いかわからないくらい！

現在わたしは、MCL のスカラシップセクションで、スタッフとして働いています。
MCL は、一つの家族だと感じています。
これを読んで下さっている支援者の皆様も、ここの子どもたちを支えて下さっている、家族のお一人だと感じています。
わたしは、いつもお祈りを捧げるときに、
「これからもいつまでも、MCL が貧しい子どもたちを助ける神様の道具として、働き続けることができますように！」
と、アッラー神様に、祈り願っています。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、
母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。
その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。
学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

生きる力ってなんだろう

ミンダナオの子どもと日本の子ども

松居　友

日本からの訪問者たちのほとんどは、最終日のお別れ会のときに、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちに囲まれて、お別れの歌をうたってもらい、手をにぎられ抱きつかれると泣き出す。

なかには、現地に到着したとたん、大喜びで迎えてくれる子どもたちに囲まれて、茫然自失となったあげく、ワッと泣き出す若者もいる。

「どうしたの？」

驚いてぼくがたずねると、彼はこう答えた。

「ぼく、こんな体験、いままで日本で、一度もしたこと無かったんです。こんなにたくさんの子どもたちの、明るい笑顔に囲まれて、手をにぎられて、抱きつかれて・・・。」

聞くところによると、ミンダナオ子ども図書館に到着したときは、日本にいるときと同じように、自分と人との間には距離をたもち、壁を作らなくてはいけない、と思ったという。

ところが、いくら努力しても、ここの子どもたちに囲まれてしまうと、心の壁がどんどん壊されていって、何が何だかわからなくなって、とつぜん涙があふれ出てきたのだという。

「でも泣いた後に、今まで知らなかった別の自分が、心の奥底から湧き上がってきたようで、幸せで幸せで！」

こんな経験は、生まれて初めて！」

こうした若者たちの話を聞くと、日本では、生まれたときから、たとえ友だちどうしでも、意識的に距離をたもち、あるていど心に壁を作りながら生活しないと、やっていけなかったという。

小さいときは、保育園や幼稚園の中で遊ぶのがせいぜいで、小学校にあがっても、放課後に子どもたちだけで徒党を組んで、野山を駆けめぐったり、川でカエルやザリガニを捕ったりする体験もなく過ごしたのだという。

さらに中学校に入ると、放課後は運動部の部活で、勝ち負けを重視したバスケットやサッカーなどのゲームをやらされたのだという。

「そんなとき、運動のできる子はスターになるけど、ぼくは運動神経がにぶかったから馬鹿にされて、『おまえなんか、でなくっても良いよ。引っこんでろ！』って言われたんです。そのあたりから、だんだん学校に行くのが嫌になって、引きこもりになっていった・・・。」

聞くと、彼は、中学だけは何とか卒業したけれど、その後は受験競争を勝ちぬくために、学習塾にいかされて、とうとう登校拒否をおこしてしまったのだという。

「でも両親とも働いていたから、家にいても部屋に閉じこもって、スマホあいての孤独な生活だった。でもここに来ると、子どもたちのようすがぜんぜん違う！」

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、年齢や宗教や民族は違っていても、子どもどうしの間に壁がなく、外国人の自分にさえ、心を開いて飛びついてきたのでビックリしたそうだ。

日本から訪れたべつの少女も、帰りがけにこう話してくれた。

「わたし、ミンダナオに来て、本当に良かったわ。

ここの子どもたちだけじゃなくって、連れていってもらった山の村や、近所で遊んでいる子どもたちも、血がつながっていいなくても兄弟姉妹のように、歳上の子が、赤ちゃんのめんどうを見たり、下の子が、お姉ちゃんやお兄ちゃんにめんどうをみてもらったりしている姿がとっても良かった。

とくにここに住んでいる子たちは、宗教や種族がちがっていても、みんなでいっしょに楽しくおしゃべりしながら、洗濯や掃除をしたり、花壇や野菜の手入れをしたり、ご飯を炊いたりしている。

そして、わたしの手も引っ張って言ってくれたの。

『いっしょに遊ぼう！』

『いっしょにお料理しようよ！』

『お洗濯、いっしょにしない？』

『お花、頭にさしてあげるね！』

わたし、こんな体験、はじめてで、思わず涙があふれてきちゃった。」

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

そんな、若者たちの話を聞くにつれて、今の日本の若者たちが置かれている孤独な状況が見えてきた。

ミンダナオ子ども図書館を立ちあげて十年間は、現地活動にいそがしく、現地の子どもたちに心を集中させるためにも、なるべく訪問者を受けいれない形ですすめてきた。

けれども、孤独な日本の若者たちが、現地の子どもたちと出会って感動し、生きる力をえて帰っていく様子をみるにつけて、日本の若者たちを放っておくことが出来なくなり、彼らが心を癒やす場として扉を開くことに決めた。

そのご数年間、訪問してくる若者たちの様子を観察し、危険地域であるがゆえに訪問規定もしっかりと決め、お客様としてむかえず、自然でありのままの家族として、子どもたちが友情と愛で迎えられるためにも宿泊費もとらないことにした。

とりわけ不登校や引きこもりで心が傷ついていたり、自殺未遂をくり返していたりしていた子たちの場合は、心を癒やす場として、一ヶ月ほど滞在したりもできるようにしている。

日本から来た若者たちを見ていると、ミンダナオ子ども図書館を訪れてから数日たつと、顔つきがどんどん変わり始めていくのがわかる。

まるでその辺に咲いている花々や、空を飛んでさえずっている小鳥たち、とりわけいつも彼を慕っていっしょに遊ぶ子どもたちと同じ、自然で和やかな顔になっていく。

引きこもりだったという若者も、いよいよ、お別れの日が近づいて来ると、ぼくにいった。

「できれば、ここに住みたいぐらい。本当に日本に、帰れるかなあ?」

最終日の夜、子どもたちに囲まれて、別れの歌を唄ってもらうと、最後は抱きあいながら大泣きに泣いた。

「帰ってくるからね。必ずまた、もどってくるからね。ぼくのこと、忘れないで!」

そして翌日、ダバオの空港に送りとどけると、旅立ちの前にこう語った。

「日本では、つらいこと寂しいことが、本当にたくさんあって、時には死にたいと思ったけれど、もう大丈夫!

これからもつらいことはあるだろうけど、いざとなれば、ここに来れば救われるから!」

「うん、いつでも訪ねておいで。ここは君のセカンドハウスだからね。

再会のときは、子どもたち、もっと喜ぶよ!」

また中高年の訪問者がミンダナオ子ども図書館を訪れて、生き生きと遊んでいる子どもたちを見て必ずいうのが、「自分が子どもの頃には、ちまたに同じ風景が広がっていたものです」という言葉だ。

神戸から来たという男性は、こう語った。

「ほんとうに、懐かしい風景ですね。

わたしが子どもの頃には、学校が引けると毎日裏の山を走りまわって遊んだものです。住宅地の道路が舗装されてからも、路上で石けりや缶けり、縄跳びやおにごっこをして、近所の子どもたちどうしでも、本当に仲良く遊びました。ここの子どもたちを見ていると、当時のことが思いだされてなつかしくて、いいなあ。いっそうのこと、老後はここに住みたいなあ。」

わたしも決して日本が嫌いなわけではないのだが、ミンダナオに帰って、子どもたちが遊んだりしている姿を見ると、心底ホッとする一人だ。

ぼくが、子どもの頃に住んでいた東京の杉並区の荻窪のあたりの家々でも、住宅と住宅のあいだにブロックやアスファルトの塀はなく、あって生け垣だったから、ときには学校からの帰り道に、お隣さんとの境の生け垣をくぐり、庭をとおりぬけて帰ったりした。

するとお隣のおばさんは、声をかけてくださった。

「おかえりなさい!そろそろ柿の実も熟れてきたから、木に登ってとったらいいよ!」

ミンダナオ子ども図書館の敷地内でも、子どもたちは木に登って、マンゴーやマンゴスティン、ときにはドリアンをとっては、みんなで分けあって食べている。

また、山の集落ならば、草原や斜面でも、走りまったり木登りしたりしているのは日常で、とりわけ感動的なのは、洗濯物をつめたタライを頭に、友

ミンダナオ子ども図書館に関しての情報、２００６年からの日々の活動報告など
詳しくはウエップサイトのホームページを参照されると、より深くわかります。
検索：「ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm
フェイスブック：松居友　or　ミンダナオ子ども図書館

だちどうしが弟や妹を引きつれて、山の斜面の小道をかけくだり、ふもとの川に洗濯に行くようすだ。

貧しくて学校に行けない子たちやお姉ちゃんも、ときには赤ちゃんをおんぶして、おなじもの同士があつまって、みんなで川に洗濯にいく。

そして、洗濯が終わって、木の枝と枝の間にはりめぐらせた紐に、洗濯物を干してからが本番！いっせいに、みんなで素っ裸になって川に飛びこんで、自分を洗濯しながら大はしゃぎだ。

中高年の方々が、そんな風景を目の当たりにして感動する気持ちはよくわかる。

キダパワンは、北コタバト州にあり、

フィリピンの最高峰２９５４メートルのアポ山の山麓の高原都市で、車で走れば5分で抜けてしまうような小さな都市だけれど、この街にも市場があって、裸電球のしたで、魚や肉や野菜が売られている。

ミンダナオ子ども図書館の炊事担当のスタッフは、夫の運転する三輪バイクのトライシクルに乗って、毎日かならず市場に買い出しに行くので、訪問者の若者たちや中高年の方々も同行する。

市場は、活気に満ちていて、大勢の売り子たちの前には、大きなマグロからはじまって、サバ、アジ、サンマといったいろいろな魚やイカ、タコ、貝、そして海ブドウやモズク、ヒジキなど、さらに生きて動きまわっているヒトなども売っている。

「おいしいよヒト。焼いて食べるとおいしいよ。とりたてだよ！生きているよ！」

それを最初に聞いたときは、「ヒト（人）を売っているのかとビックリしたけれど、後で、ナマズのことをこちらでは、ヒトと呼ぶのを知ってなっとく。

そんな生活を中高年の人々が見ると、自分の子ども時代を思いだし、とっても懐かしく故郷に帰ったような気持ちになるようだ。ミンダナオで、子どもの姿を見ない場所はない。

こうした市場の中でも、子どもたちはどこにでもいて、ときには小さなザルに、現地ではラマスと呼ばれる味付けに使う小粒のニンニクやトマト、香草やショウガなどをつめてやってきて言う。

「ねえ、これ買って！」

「いくら？」

「１０ペソ（２５円ぐらい）。」

「学校、いってるの？」

「ええ、でも母さんの収入だけじゃノートも買えないし。」

「偉いなあ、それで、がんばっているんだね。それでじゃあ、そっちのショウガも買ってあげるね。」

「わーい。ありがとう。」

ミンダナオの子どもたちは、とっても家族おもいで、嫌な顔一つせずに、本当によく母さんや父さんのお手伝いをする。

また骨休めのために、妻と二人で夜の屋台で焼き鳥をほおばりながらビールを飲んでいても、働いている母親のそばに、けっこう子どももいっしょにいて、なぜかちまたにも友情と家族愛が感じられ、自分が子どもの頃に遊びまわった場所や風景、そしてちまたの時間の流れを思いだす。

中高年の訪問者がおっしゃるように、日本にもかつてあった、友情と愛に満たされた、ちまたの風景が、ここにはいたるところで生きている。

ここ数十年のあいだに日本では、そうした子どもの遊びや人情あふれるちまたの風景が、経済の高度成長とともに消えていき、お金と物が優先される、仕事社会に変わっていった？

子どもたちが未来だとするならば、たとえ貧しくとも、子どもたちが明るい社会は、未来が明るい？

たとえ経済的には豊でも、子どもたちが引きこもって自殺していくような社会は、未来も暗く、世界の中で引きこもって死んでいく？

生きる力ってなんだろう。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になっても治せないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、**医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援**・・・**自由寄付**
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と１２月には、絵本をお送りします。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つかっていないにも関わらず放っておけず採用している１４０名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている２００名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々に充てています。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

２，**植林環境支援**・・・６万円（ゴム、カカオの木６００本、１ヘクタール、現地作業代）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。

３、**保育所・下宿小屋建設支援**・・・９０万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）
総コンクリート製をご希望の方は、１３０万円で可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は、修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み生活を保障（現在８０名)。
支援には学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

１，**大学生スカラシップ**・・年額７００００円（月額５８３３円）
（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）

２，**高校生スカラシップ支援の方へ**・・年額６００００円（月額５０００円）

３，**里子支援（小学生）**・・・年額４００００円（月額３３３３円）

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」と書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。その後、機関誌に同封して本人からの手紙(英語)、６月にスナップ写真、８月に成績表、１２月にはカードが届きます。
プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して渡します。
小学生の里子の場合は、手紙はありません。プレゼントは可能ですが、文通は出来ません。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、FAX で日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCL に宿泊していただき自宅にもご案内します。米は自給していますし宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mclmindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。講演を企画してくださるのも、大きな支援です。

メール：mcltomo@yahoo.co.jp 電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines